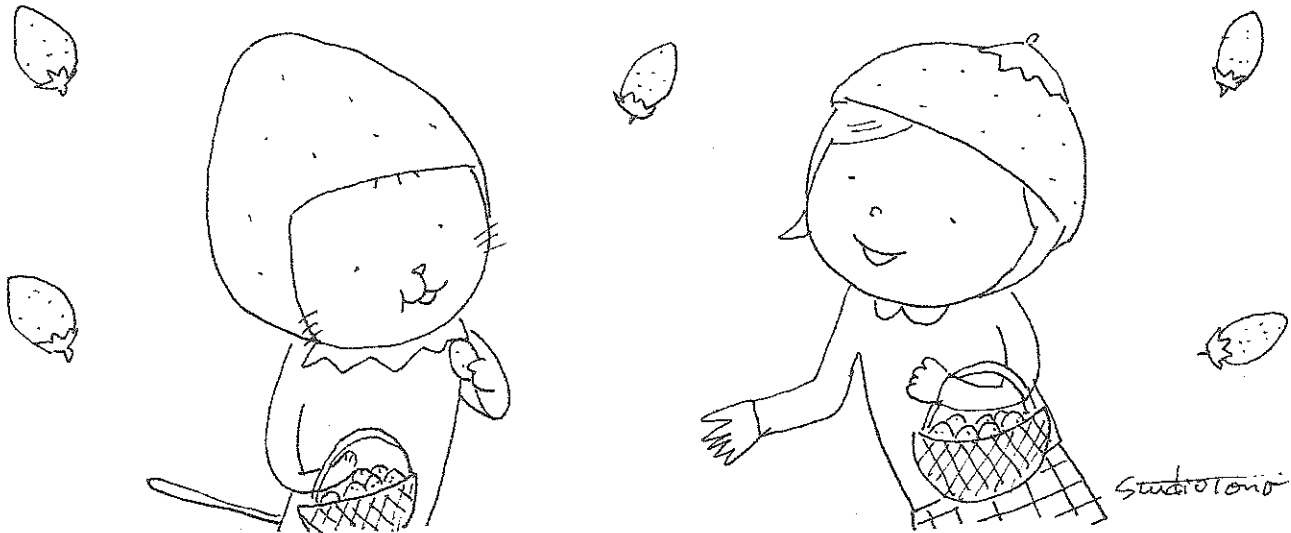


この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



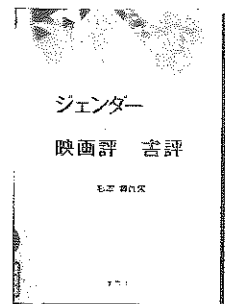
ジェンダーで読む映画評／書評

杉本貴代栄 著 学文社 2020年(A:フェミニズム)

本書は書名の通り、ジェンダー視点から映画や書籍を評論したものである。全部で21編あり、うち12編が映画評、9編が書評で構成されている。総228ページなので、1編あたり約11ページ。新聞などに載る書評よりもかなり長いのは、映画のバックグラウンドや関連する専門知識の解説に多くのページが割かれていることも一因だろう。著者の専門領域は社会福祉で、その関係書籍の書評が多い。国際的な政策事情に通じていることもあり、映画は洋画の方が多く取り上げられている。

「Shall we dance?」という映画は日本で作られ、後にアメリカでもリメイクされた数少ない作品である。本書では日本版とアメリカ版をジェンダー視点から比較している。興味深く、実際に作品を見て比較したいという思いに駆られた。

ちなみに、りいぶるの図書室でもDVDの貸し出しを行っている。本書で取り上げている映画のうち、「フラガール」「スタンドアップ」「ミリオンダラー・ベイビー」「ビリーブ」「かもめ食堂」の5本が所蔵されており、本書と合わせて鑑賞されてはどうだろうか。(O.S)



お母さんの自己肯定感を高める本

松村亜里 著 WAVE 出版 2020年 (E: ころこ・癒し)



本書は、お母さんとその子どもの自己肯定感を高めることを目指そうとする内容のものです。自己肯定感とは、「自分が好き」「(自分は自分で)十分だ」という意識です。そして、条件なしでこの意識を持てることが重要なのだそうです。

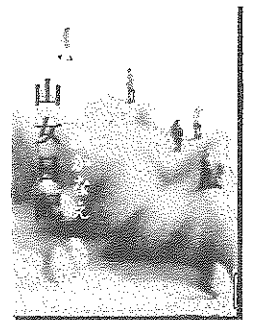
まず、お母さんの自己肯定感を高めるための14のワークが紹介されています。ワークは、ころこ、からだ、社会的な健やかさを高めるためのもので、本の中の書き込みスペースを利用して具体的に進めることができます。そして、自己肯定感が高いまま生きていくために必要な考え方として、「セルフコンパッション=大切な人を思いやるように自分を思いやること」が挙げられています。このセルフコンパッションができるようになると、子どもにもこの方法で関わっていくことができるようになるそうです。

実際に生活していると、自己肯定感が下がったり、セルフコンパッションも忘れてしまうような出来事があるふれています。そして、気づけば、子どもをただ叱りつけていることが増えがちではないでしょうか。私は、頭の片隅に本書の内容を留めておいて、少しずつでも健やかな対処ができるようになりたいと思います。

(A.T.)

山女日記

湊かなえ 著 幻冬舎 2014年 (K: エッセイ・文学)



登山にことよせて紡がれた物語の連作短編集である。目次には「妙高山・槍ヶ岳・利尻山・白馬山」など、登山愛好家なら胸弾む著名な8座が並んでいる。登場人物はおもに各編2人。「山女」といっても、登山が趣味の女性のことではない。一足の登山靴に魅了されて初めて登山に挑むデパート店員とその同僚とか、婚活で知り合ってなりゆきで登山する男女であったりする。ほとんどが30代の独身者で、仕事、結婚、人との関わりなどなど、悩み多き日々のなかで、ふと登山することを思い立った人たちで、装備不足者、山でこそ美味をと疑った飲食物を用意した者など様々だ。

大自然の中、登頂への苦しい一歩一歩を重ねて行くうちに、心中の霧に薄日が差し込み、やがて山頂に立ち想像を絶する景観を目にしたとき心に変化が起きる。なにかと複雑にからんでいたような心に変化が起きる。新しい一歩を踏み出せる何かを得る。それは下界では得られなかったものかもしれないのだった。

(大空)

※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:ころこ・癒し F:子育て・絵本 G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書

これはしない、あれはする

小林照子 著 サンマーク出版 2018年 (K:エッセイ・文学)

著者は86歳の美容研究家・メイクアップアーティスト。長い人生経験の中で学んできた知恵を伝えたいと思い本にしたとのこと。

毎日を機嫌よく生きる方法として「しないほうがいいこと」と「したほうがいいこと」があり、非常にわかりやすく書かれている。

各25項目あり、読み進めるうちに、なるほどその通りとうなずく自分がある。その一方で、できるかなと不安だが少しでも実践したいと思う。巻末には10代から100歳までの人生のころざしの目安が記されている。

それを目標に前に向かっていこうという希望がでます。ぜひ一読を！

(はんちゃん)

小林照子



これはしない、あれはする

町会福祉ぶんぶん奮戦記

福島昭子 著 川辺書林 2009年 (O:その他)

この本は、長野県松本市蟻ヶ崎西地区「愛ぶんぶん」という宅幼老所がどのような経過で成立してきたのか、役割について、世話人の福島さんへのインタビュー方式で語られています。

普通の専業主婦でしたが、子育てを終えたあと公民館で学習し、男性中心の住民組織に女性の感性を取り入れた地域づくりをしています。そして、町会・自治会(地縁型住民自治組織)と福祉・環境などの目的別組織(テーマ型市民活動組織)の連携と協力で地域づくりを活性化させました。

「地域福祉」は困っている人を無料で助ける活動だけではなく、すべての人の暮らしを高める活動として捉えないと続かない。税金でまかなってもらっただけでなく、自立していく、コミュニティビジネス、有償ボランティア、まちづくりにつなげていった実践について話されていて、とても参考になる話だと思いました。

(か)



超辛口先生の赤ペン俳句教室

夏井いつき 著 朝日出版社 2014年 (O:その他)

近年俳句がブームになっている。俳句人口は100万人とも1000万人とも。古い統計だが2016年の社会生活基本調査によると25歳以上の詩・和歌・俳句・小説の創作人口が212万4000人。詩や小説の割合は低いことが予想されるので俳句は100万人か？年齢制限がなければ間違いなからう。このブームの牽引者というか立役者がこの本の著者である夏井いつきさん。「プレバト」の俳句コーナーで忸度なしの厳しい添削でおなじみである。

この本ではプレバトで紹介された芸能人の俳句を題材に、俳句の作り方を初心者にもわかりやすく教えてくれる。実際作ってみると俳句は難しくない。季語を一つ入れて5・7・5の17音で出来上がり。私の教え子(高3)などは私が添削しなくても全国公募の大会で2人も入選してしまった。みなさんも一句ひねって新聞や雑誌に出してみたいか？ちなみに上記調査で和歌山県の創作人口は14000人もいます。

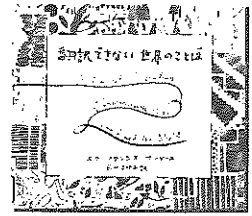
(紀生)



翻訳できない世界のことば

~An Illustrated Compendium of Untranslatable Words from Around the World~
エラ・フランシス・サンダース 著 前田まゆみ 訳 創元社 2016年 (F: 大人絵本)

エラ・フランシス・サンダースは20代の著者、イラストレーター。さまざまな国に住んだことがあり、本書以外にも「誰も知らない世界のことわざ」「ことばにできない宇宙の不思議」などを執筆しています。



さまざまな国に住んだことのある著者だからこそ感じた、「翻訳できないことば」。「翻訳できない」とは、「apple=りんご」のように1語対1語で他言語に訳せない、という意味です。本書にも掲載されている「ポケット」「わびさび」など、日本人にとっては当たり前の言葉でも、日本語以外を話す人達からすれば解釈するのが難しいものがあります。ことばと文化はとても関わりが深く、ことばには文化が濃く反映されています。世界中にはたくさんのことばがある！ことばはとても面白い！と思わせてくれる作品です。

本書に載っているのはごく一部。自身の「翻訳できないことば」をぜひ見つけてみてください。ちなみに、本書の中の私のお気に入りのことばは「VACILANDO」スペイン語です。(めい)

ライオンのおやつ

小川糸 著 ポプラ社 2019年 (K: エッセイ・文学)

主人公の海野雫は、医者から癌のステージIVであることを告げられ、人生の最期を過ごすために「ライオンの家」を訪れます。個性的なスタッフや入居者に囲まれた暮らしを、雫の視点から綴った物語です。

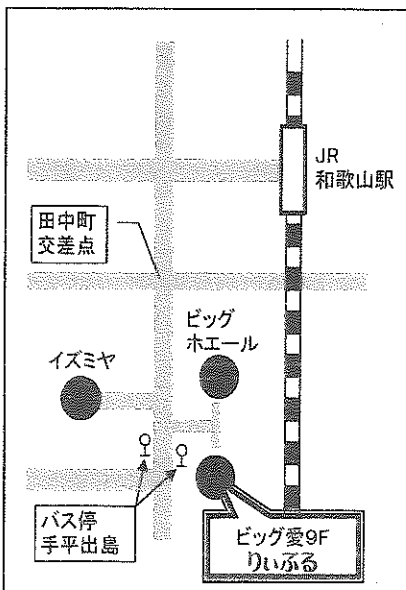
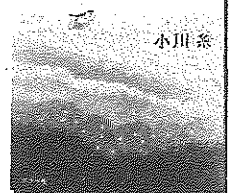
「雫さん、辛いときこそ、空を見上げて思いっきり笑うんです。そうすれば、あなたよりもっと辛い思いをしている人たちの希望になりますから」

誰もが必ず迎える「死」を、どう受け入れるか。雫は「ライオンの家」で、その答えを自分なりに見つけます。「死を受け入れるということは、生きたい、もっともっと長生きしたいという気持ちも正直に認めることなんだ。」

人生を丁寧にしまおう、その参考になる本だと感じました。

(やっくん)

ライオンのおやつ



この本 よんだ? 第24号 (2022年4月発行)

◇企画・発行 りいぶるびらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

2021年末の原稿切前に会員内 HP のサーバーダウンして、びっくりしました。約10年にもなりますから、見直しも必要ですね。今回は、原稿が集まってみると字数が多い人が集まり、編集 S 氏は四苦八苦。選書も内容も10年前よりはレベルアップしたかな。

★あなたも書評を書いてみませんか? ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。 E-mail libreplus@yahoo.co.jp